

诗

4

2023

中国书画函授大学肇庆分校建校二十周年纪念册



植 菌

能村 研三

さくららの句

先師登四郎の随筆集『鳩の手帖』中の「さくららの句」に次のような一節がある。

「さくららの句は、若い時は始ど詠んでいない。たまに詠んでも『花冷』『余花』『さくら葵降る』という風に、わざと華やかさを避けたものが多い。」しかし、全国にある登四郎の十七基の句碑の中に桜を詠んだ句が四基もある。

ひらく書の第一課さくら濃かりけり

市川学園グラウンド三節句碑

睦み合ふごとし雨中の松さくら

岡崎市 大樹寺境内

早池峰の雪かがよへり朝さくら

花巻市 自性院境内

霊地に天降るしだれさくらかな

東吉野町 實蔵寺境内

「ひらく書」の句碑以外は、登四郎の生前に建立されたもので、句碑の建立には自分自身も立ち会っている。

私が俳句を始めた頃、登四郎から初心時代に「雪月花」を詠むのは難しい

涅槃寺よごれ乾きの靴並ぶ

春遠し山へ轍のいく筋も

猟銃音山崇高となる一瞬

春の宿振り子時計に寄贈の名

今日立春直行直帰してみたり

表裏分からぬままに海鼠突く

余寒なほ鬼門封じの真つ赤な実

植菌の楯組まれたる臚かな

と言われたことがある。

これは日本人の心の奥深くに「雪月花」の美意識が、人恋しさの思いを纏いながら息づいていて、俳句の世界でも、これほど親しまれた主題はなく作句例も多く、新機軸を打ち出そうとしても、蟻の這い出す隙間もないほど、名作が薈んでいるからだろう。

「花」の代表格の「桜」もその例外ではなく、初花のういういしさ、咲き満ちた華やき、散る花への移ろいなどなど。まして満開の桜などの華麗なるが故に却って詠みにくいものである。

先師登四郎も随筆を書いた頃は「桜」を詠みこなすには何十年という歳月がかかるものだということを認識していたのだろう。

今年の桜の開花は例年より早そうだが。三月末に鳩亭近くの真間川の桜並木を沖の皆さんと吟行をしてみようと思う。

能村 研三

勢よく水吸ふ山毛櫨や獵期果つ

川底を覗き見る癖春浅し

エンドロールに続き降り積む春の雪

余寒なほ湯呑の窪の手に馴染み

泥靴の屈みおろがむ座禅草

雪解川越え激辛のカレー欲る

杣人の錠を掛けたる落し角

家の近くに丘陵があつて、そこに棲み

ついている雉が裏の畑まで餌を漁りに来る。朝その鳴き声に目覚めたりするのであるが、国鳥だけに案外と心地よい。いつぞや、野原の傾斜地で草刈り機を振り回していたのであるが、こんもりとした草の一叢で、突然奇声を上げてばたばたと駆け出す鳥がいた。予期せぬことでこちらも驚いたが、それが雉であつた。

何と草刈り機の刃で雉の尾羽をバツサリと切ってしまったのである。雄は子に愛情が深く、野火で焼け死んでも子を守るうとしたという話もあるくらいで、私の時も巢を抱いていたのであろう。

そんな話とは違つて登四郎先生の句はあくまで清々しい「鞍馬五句」とあるうちに、「雉子鳴いてしぐれ明るむ杉の空」がある。深閑とした景もさることながら、さあつと降りかけた小雨が、雉の澄んだ鳴き声とともに晴れ上がつてゆく様子が感じられる。

濤声集

とんがつて

千田百里

無為の日のテレビに笑ひ海鼠食ふ
鬼嫁が己に撒いて年の豆
年の豆鳴呼手の平に乗り切れぬ
啓蟄や架線工事の函登る
涅槃図の余白探しに膝行す
*とんがつて生くるも一世鳥雲に

貝の皿

辻美奈子

*浅春や指輪休めの貝の皿
黒といふ紅深うして寒牡丹
麦の芽の戦ぐすなはちおののける
かかる世の鬼のぬる闇寒土用
永久欠番たり春雪の足跡は
タラちゃんの居ない二月の日暮かな

蒼茫集

透かし彫

平松うさぎ

* 立春大吉水は両翼拵げたり
水の無き月に海の名冴返る
探梅行武蔵野線の大曲がり
六花土器に始まる透かし彫
中流とふ定義曖昧うすごほり
啓蟄や石弛むかに野面積み

雨の弾力

甲州千草

凍滝のところどころの怒りをり
寒夕焼婚の余韻の色ならむ
酒に炎を咲かせてをりぬ寒鱈
* 夜の雨の弾力をもて春来る
ここからは走るとぞ告ぐ春の雨
窓すこし汚れて来たり初燕

低山

辻前富美枝

仮囲ひ解けし駅裏陽炎へる
梅見茶屋けんちん汁のよく売れて
低山と侮るなかれ山笑ふ
詩は弾丸詩は胸に来る西行忌
にはとりに帰る地は無し霾ぐもり
* 芽起こしの雨かスープレの豆の色

水の楽想

矢崎すみ子

* 縄文の水の楽想草つらら
針箱は母の花籠春障子
返照の松の風鳴る里神楽
風折れて薫る日差しの冬菫
三寒の四温の五百羅漢かな
北信濃雪のカノンのピアニシモ

飛鷹選評



能村 研三

陽を恋うて細くなりたる氷柱かな

♫

中谷 恭子

中谷さんのお住まいの青森のような北国であれば、こうした景はどこでも見られるのだろうか。氷柱が出来るのは春の兆しの一つで、雪が溶ける程度の日中のあたたかさと、氷点下になる夜の寒さの両方が必要だそうだ。溶けたり凍ったりを繰り返しながら、氷柱は長く太くなっていく。氷柱は陽の光を恋しながら表面が溶け、つやつやと細くなって輝く氷柱は、なんともいえない美しさがある。氷柱にもまるで意志があるように捉えているのが面白い。

花の兄や死装束の 荒行僧

柿内 清一

梅は、早春、どの花よりも先に咲くことから、「花の兄」という名がついた。寒中にいち早く春の訪れを知らせてくれる梅の存在は、我々のくらしの中でもやはり待たれる大切な花で、その花が咲く頃、荒行僧は常に死を覚悟した厳しい修行に励むのである。中山法華経寺で行われる百日荒行は寒中も含めて日に七回の水行と読経の修行が続く。

さてさてと 俎上の海鼠口どちら

吉村さよ子

海鼠を詠んだ芭蕉の句に「へいきながら一つに冰る海鼠哉」がある。桶の中が凍っていて、そもそも尾も尾もわからない海鼠が一体のように見えたという句。この句も俎上に載せて料理しようとした作者は、海鼠の口がどこにあるかわからずに考えこんでしまった。

寒卵はつと生まるる 向学心

古谷由紀子

「寒卵」は、虚子編『新歳時記』には「寒中に生んだ鶏卵である。永く貯蔵に耐へ最も滋養に富むといふ。寒中であるから割つても皿の中に黄身は小高く盛り上がつてみて心持がよい。」とある。寒卵の新鮮さにあやかっ自分自身もさらに向学の道を究めたいと思った。

注連飾る千代の天突く御神木

長山 正子

国歌「君が代」に歌われる「千代に八千代に」、にもあるように幾千年の長い歴史を誇る御神木が天を突くように聳え立っている。未永く変わらないようにとの祈りをこめて注連が飾られた。

初御空波の奏づる 越天楽

坂井 博

お正月によく耳にする雅楽の越天楽は、日本の古典音楽として、千二百年以上の歴史を持つと言われている。よく聞くとその調べは神々しい初御空に穏やかな波が打ち寄せているように聞こえてきた。

春北風 七田文子

*斜めとは急ぐかたちや春北風
啓蟄やミイラは布に十重二十重
魚は氷にもぐらばこぼこ塚作る
神杉のつづく石段雪解靄
啓蟄や何も無いのに躓いて

シンフォニー 宮坂秋湖

*夜の雪外燈無音のシンフォニー
山国は山国の雪眩しめり
虎落笛一人の居間に怯えたり
豪雪や建国記念日旗あはれ
湮葉経ラストの声は沈みゆく

精米機 小林陽子

校章は雪の結晶雪ふれふれ
薄氷のあはひを花のやうな雲
オルガンの蓋の木目や春隣
*立春の光の中の精米機
含羞を根に閉ぢ込めてはうれん草

寒 鯉 中村重幸

なかなかにいける口なり女正月
*水槽の底からはがす寒鯉
ジャムの蓋固く締りて寒に入る
ちやんちゃんこ脱ぎ神主となりにけり
水像の馬の嘶く星の夜

地を淨む 浜田はるみ

*獅子頭外し暫く人でなく
臘梅の濾過せし日影地を淨む
街をゆく影伸びらかに四温晴
春隣弾む声する試着室
折鶴を四角に戻し流水期

一村を 川高郷之助

*一村を温むるやうに冬霞
水鳥の閉ぢ籠もり派と奔放派
寒星の揃ひの早き蝦夷の村
枯野原風ほど雲の動かざる
妻留守の静かに暮るる障子かな

小さき平和 村上葉子

この町に寂しき銀座鳥総松
白鳥は朝のしじまを奪ひ合ふ
*並びたる同形異夢の寒卵
凍山河胸を離れぬ一行詩
餅焼けば小さき平和の膨らみぬ

雪吊りの天 須賀ゆかり

雪吊りの天伝ひくる雫かな
*晴れ渡ることの淋しさ冬の蝶
菜畑のバケツ逆しま冬夕焼
凧を帰り粗煮の目分量
石版に曲線冴ゆる天体図

逆光 澤田英紀

格納庫機影見送り春を待つ
新道の映えし白線日脚伸び
柏手に応ふ鳴き龍冴返る
*逆光の暗みへ隠る鎌鼬
古民家の土間の奥より冴返る

たうたうと 広海あぐり

背表紙の歪む字引や霾ぐもり
*春光をまぶし漢江たうたうと
無事これを祖国と思ふうらけし
下北の寒さもるとも汁煮立つ
水輪より鴨の首出で水輪曳く

沖作品



能村研三選

焼芋屋の呼び声遠し里恋し

青森

中谷 恭子

* 陽を恋うて細くなりたる氷柱かな

雪おろす漠無口になりにつけり

雪女郎眠れぬわけの二つ三つ

一時間待つとバス来る春隣

ホツチキスよき音立てて寒の明

静岡

柿内 清一

ああ言へばかう言ふ猫の恋の夜

梅の香のこれより先は下乗とや

* 花の兄や死装束の荒行僧

うちうちの母の巾上げ草履

靴の泥乾きてかるし探梅行

自分史めく余り毛糸を繋ぎ編む

千葉

吉村さよ子

* さてさてと俎上の海鼠口どちら

読初の訛を声に東歌

包丁に全身のせて餅を切る

* 寒卵はつと生まるる向学心

日輪の束の間淡く風花す

晴れわたる根雪の底に水の音

春を待つ石は光を蓄へて

うらかけし水平線のふくらまる

初明り「沖」のまほらまうさぎ跳ね

長山 正子

* 注連飾る千代の天突く御神木

初旅や靴に詰むる電子辞書

飛行機過ぐ平和な民の若菜摘

冬の霧明けの高階宙に浮く

今年はと今年も思ふ去年ごとし

曜変の深き静寂冬銀河

坂井 博

寒風や大道芸の缶にドル

初御空波の奏づる越天楽

頑固さは父の矜恃か冬帽子

古谷由紀子